

院内町誌の刊行

後藤重巳

昭和三十年に合併によって新生した院内町では、五十三年以来、町誌の発刊を計画し、調査・編集作業をすすめていたが、五年の歳月を費して、去る五十八年十一月、見事その完成を見た。発刊後、やや時日を経て、機を逸した感はあるが、今回、その書評を依頼されたので、拙い筆を以って発刊の快挙に対して祝意を述べたい。

同町では、五十三年七月、町誌編集委員五名を委嘱、町誌刊行事業に着手した。監修を、大分大学名誉教授・別府大学教授の渡辺澄夫氏に依頼するとともに、町誌という刊行物の性格上、可能な限り広く町民の内から執筆者を選び、一方では最高水準の研究成果を取り入れるべく、県内在住の第一線の研究者を各分野の執筆に動員、万全の体制をもって調査・編集活動に臨んだ。その結果、まさに期待以上に内容の充実した町誌として結実したのである。

B5版、本文9ポイント活字二段組みの体裁をもつ本書は、七〇七頁の紙数を誇り、題字は町長・佐藤醇一郎氏の揮毫による。まず、両表紙裏には、豊前国絵図のうち、現町域該当部分をカラー印刷し、グラビア三ページには、第一ページに町木「銀杏」、町花「しゃくなげ」、院内町中央部の俯瞰写真を、第二ページには、同町が誇る国指定文化財・竜岩寺の三尊仏及び奥の院礼堂、第三ページには町内に生そくする国指定特別天然記念物の「オオサンショウウオ」と、同町の名産「ゆず」の加工品とがカラー写真で収められている。

グラビアに続く平松大分県知事の「発刊に寄せて」と題する祝文には、院内町民の「自助努力」を高評する賛辞が寄せられ、渡辺教授の監修の辞、町長及び編集委員長・安部正孝氏の発刊の序文では、同町誌の持つ使命と意義との何たるかについて

て、極めて適切な指摘がみられ、本文のすぐれた内容に、更に一層の花を添えている。

さて、本書の内容は、本文六編・資料編一編の計七編から構成されている。その構成目次及び執筆者を一覧すると、次の如くである。

第一編 郷土の自然

第一章 地形・地質

成重欽也

第二章 気 候

大見政弘

第三章 動物・植物

安部正孝・佐藤真一
荒金正憲・小田 毅

第二編 歴 史

第一章 先史・原始時代

後藤宗俊
小倉正五

第二章 宇佐・院内地方の古代

西別府元日

第三章 中 世

橋本操六
成田 勝

第四章 近 世

豊田寛三・秦 政博
榎本讓司

第五章 近現代

末広利人

第三編 躍進する郷土

第一章 院内町の誕生

後藤佳之・加来軍司
岩本 績・後藤正二

第二章 町勢の現状

第三章 行政と議会

第四章 社会福祉と生活環境

第五章 院内町の産業

第四編 教 育

第一章 近代教育前史

安部正孝

第二章 学校教育

第三章 社会教育

第四章 院内町の文芸

第五編 文化財

第一章 院内町の文化財

小泊立矢

第二章 絵画・書

第三章 彫 刻

第四章 金工芸

第五章 木造建造物

第六章 石造美術

第七章 ゆたて神楽

第六編 神社・寺院

第一章 十七世紀の社寺

後藤正二

第二章 神 社

第三章 寺院

第二章 人の一生

若杉昌昭

第四章 堂宇

第三章 年中行事

加藤泰信

第五章 地域社会と信仰生活

第四章 民具

段上達雄

第七編 民俗

資料編

院内町教育委員会

第一章 信仰

染矢多喜男

(節以下は紙数の関係上、省略する)

第一編郷土の自然編は、全三章八節から成り、先ず院内町域で営み続けられた人びとの生活舞台となる自然の様子に関して精密な調査に基づく詳細な記述となっている。特に第三章の動物・植物の節や項では、豊富に写真を用い、その結果、自然の神秘・美しさ・その恩恵の偉大さなどについての大きな示唆が与えられ、近時、急速な勢いで進んでいる自然破壊という大きな社会問題を根本的に考えさせる内容となっている。

第二編は、歴史編であり、内容は第一章の先史・原始時代から第五章の近現代史までの通史である。この歴史編では、郷土に生きた人びとの生き様、すなわち史実を忠実に描き出すことに重点が置かれ、その執筆者には、県史編纂室のオールメンバ―が動員され、その陣容はあたかも、県史編纂室が、一時的に院内町誌編集室に移転したかの感を与える程の陣容を誇っている。内容的には、第四章の近世、すなわち江戸時代以降に比重が置かれ、なかでも、第四章第三節の「院内谷のくらし」や、第五章第三節・第四節の明治中期・大正期の世情にかかわる記述は、新しい視点からの指摘として興味をひく。

第四編・躍進する郷土編は、合併後の院内町の行政・社会・経済の推移と現況にかかわる分野を記述したものであり、同町の素顔を知る上で必読されなければならない。

第五編の教育編は、第一章の近代教育前史として、江戸期の塾・寺子屋の一覧から始まり、第二章の学校の章では、資料「本町小中学校の沿革」の項を特設し、新生院内町の誕生する過程で姿を消した旧小中学校の本校や分校、その校歌などについても紙数を費し同町域における学校教育史を瞭然としている。

一方、社会教育に関しては別に一章を設け、草創期・大正・昭和期など戦前の社会教育の実態について述べ、第二節・第三節では最近とみに強調されている新制社会教育・社会体育の普及状態について詳細に述べている。

第四節は院内町の文芸と題し、野本白岩・岩男浩然・香下経三などの詩文を紹介し、この外、町内における近現代における詩文活動について触れている。

第五編は文化財編で、町内に所在する絵画・彫刻・金工芸品以下、多種多様な石造美術品に至るまで、豊富に写真を用いて羅的に紹介している。この編の特色は、一般的にはともすると、国や県などの指定を受けた限られた物件のみに関心が寄せられようとしている折、路傍の無名の石塔にまで、貴重な歴史文化遺産として、目を向けている点であろう。

第六編は神社・寺院編、第七編は民俗編となっている。第六編は全五章から成り、十七世紀以降に造立された寺社について述べ、第五章は地域社会と信仰生活と題し、町内小野川内における「講」をめぐる興味ある報告となっている。

第七編の民俗編は、信仰・人の一生・年中行事・民具の四章から構成され、戦後急速に変質を遂げつつある山村民の生活様態を記録にとどめ、第二編の歴史編とともに多くの紙数を費している。

最後の資料編では、院内町小字一覧及び著名な中世文書九九点を収録している。

さて、今日では、県内諸市町村の史誌の類は、殆んど出尽くし、中には新規の刊行計画さえ意図されている例もある現状下にある。しかし、これら史誌の編集刊行は、県単位の広域に及ぶものならとも角として、境域の狭い町村の場合には、史資料の遺存層がうすく、稀少な史資料を用いての記述は困難を極める作業となる。

院内町誌の編集・刊行とて例外ではなかったものと思われるが、しかし、この様な困難な作業を、町民全体が体験したことこそが大きな意義であり、町誌刊行の最大の収穫であったものといえよう。この院内町誌の刊行を機に、同町がいよいよ着実な足どりで発展する事を期待するものである。(頒価 四五〇〇円)